



嗟嘆のこころ

大河原惇行

柴生田 稔

新
歌
人
群
像

時代と歌

先に私は自然発生的な歌と頭で作る歌とを考へて見たが、またかういふ分け方も出来ると思ふ、時代環境にかかはらない型と時代環境を離れることの出来ない型と。私は今これを作品価値の問題として取りあげるつもりはないが、私の周囲の尊敬する作者の中にも、事変が起らうと戦争にならうと又敗戦しよう、終始態度に変化を見ないやうな型の人達もある。また社会に出ようと結婚しようと子供が生まれようと、一向心境に動揺を来さないやうな型の人達もある。私は時に羨望の眼を持ってこれらの作風を見るのであるが、結局は自分とは異質の世界であることを思はざるを得ない。

このように、柴生田稔は書いている。昭和二十二(一九四七)年十二月号の「アララギ」、「小暮政次歌集『新しき丘』に寄せて(二)」の一節であるが、ここに端的に柴生田稔生涯の在りようを見ることが出来る。

頭で歌を作るといふのである。時代環境と

離れることのできない型で、歌を作るというのである。

昭和五十五年の歌に次の作品がある。

救出のアピールに署名するだけかこの

現実にながし得るは (昭和五十五年)

古代より彼の半島にかかづらひ今最低

の我らが政府

白村江に敗れし皇子に一片の義心なか

りしと我は思はず

歌を見よと言はば笑ふか歴史家どもよ

歌は何より欺かざるを

一連五首の四首である。二十六年前の歌で、拉致の問題に向けた真情はまさに時代の歌なのである。同時に、過去から現在を映しだしているのではないか。

「今最低の我らが政府」の感慨は何であったのか。政治家に対して厳しく、歴史家に対して、「歌は何より欺かざるを」とぶつつけるその思いは非常に激しい。その思いの向こうに「古代より彼の半島にかかづらひ」の見方があるのだ。行きつくところは、「アピールに署名するだけか」の嗟嘆の思いであって、注意しなければならない。

生の表れとして、このような流れの上に、

如何ならむ世にしも民は生きにきとつ

ねなることぞ今日の身に沁む (十五年)

諸葛亮が南の方を拓きしこと昨日の

朝より幾度か思ふ

つきつめて今し思へば学と芸と国に殉

はむ時は至りぬ

などの歌も読むべきなのだろう。

死を恐るる文学と死を恐れざる文学と

この日ごろわが思ふそのこと (十八年)

といった一首がある。「死を恐るる」思いは人によって違うが、ここでは、戦争による死である。そこらも、今日の日本の文学及び短歌から遠くなっている。しかし、そうとばかり言っていられないのが現実なのだ。

方丈記

戦ひの現実げんじつに敢へて触れざりし鴨長

明の心理思しんりふかな (十五年)

方丈記の結びの心また思ふわれに切な

る疑ひとして (三十五年)

鴨長明にこころを寄せた歌で、昭和十五年と昭和三十五年の二首である。鴨長明に寄せ



アララギ歌会の懇親会で。左より小野田勉、稔、筆者 (1982年)

方丈記の作者はその方丈のいおりを

る思いは、柴生田稔の生涯に及ぶものであつて、柴生田稔のその文学の根幹をなす考え方であると言つていいのである。

この二首は、戦前と戦後の違いをよく示しているであろう。「戦ひの現実げんじつに敢へて触れざりし」と受け止める所と、「われに切なる疑ひとして」と方丈記の「結びのこころ」に、疑問を向けた思いがそれである。そして、二首の間に書かれた戦後昭和二十三年の次の文章を、注意しなければならない。

柴生田 稔



1987年新春のアララギ東京歌会。左より逸見喜久雄、筆者、土屋文明、落合享太郎、稔、清水房雄。

「今身の為にむすべり。人の為につくらず」と言った。方丈記もまた徹頭徹尾「身の為に」書かれている。そうして作家の態度は、いよいよよとなれば、ここに帰着せねばならぬ。君国の為でもなければ人民の為でもない。ただ己みずからの為でなければならぬ。

戦争を通った後の柴生田稔の態度とその帰結を、ここに見るのである。誠実な良心と共

に、戦争を時代の問題として、個人の問題として、鮮烈に向き合った一人の生をここに見るのである。そして又、昭和十九年に、作品を残していないことも、時代に向かう生として考えていいのではないか。

結局のところ、柴生田稔は、方丈記の「結びのころ」に疑いをいだきながら、

われつひに方丈記に組す徒然草と対照的なるその方丈記に
(四十六年)

となるのだ。

抒情の質

短歌という抒情の質の点から見れば、柴生田稔の歌の世界は、

身に沁みてさびしき午後は川こえて煤降る街をおもひうかべつ
(八年)

なまなまと赤土の崖切られしをやすらふ思ひに見つつ歩めり

わが留守に妹はをりをり二階に来て机のまはりなどいぢり見るらし

父の部屋に笑ひこゑする妻がけはひにいつしか我は心とめあつ
(十一年)

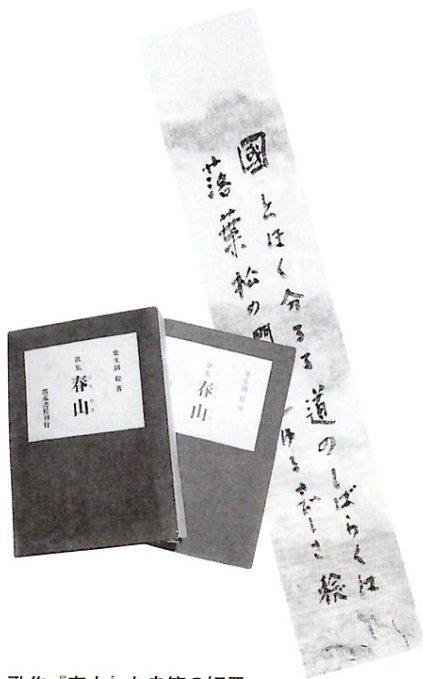
散り透きて明るき山の本立原入り来て
石に胡桃を割りつ
(十五年)

初期の歌からここに引いたが、これらの歌にその特色を見ることができのだろう。斎藤茂吉が、柴生田稔の初めての歌集「春山」の「序」に次のように書いた。

君の歌風は、謂ふまでもなく正岡子規を源流とする根岸短歌会の「写生」の道の上へ立つものであるが、君の生に根ざす温潤精緻の趣は、叙景に於ても抒情に於いても一首一首その特色を發揮し、膚理細膩、声調和穆、アララギ新進の同人中であつて鮮明に君の特徴に接触し得るもののみである。

茂吉の見る柴生田稔の世界である。その生涯において、茂吉のここに指摘した世界を押し進めたといえるのかもしれない。

そうして戦後、柴生田稔は作歌活動とその展開において、同世代の誰よりも立ち直るのが遅れたのである。理由として、病気があげられるかもしれない。同時に、激しい時代の変化に、誠実な良心をもって向き合ったことを、その理由として注意しなければならない。



第一歌集『春山』と自筆の短冊

そこに、昭和という時代を生きた歌人柴生田稔の本質を見るのである。その意味において、柴生田稔の生涯の活動は、時代の良心として信頼にたるものであったと言つていいのであろう。

はなやかに秋の日さして今しばし梢かがやく栗のひとつもと (二十二年)

琉球語が日本方言の一つなる事実だにせめて人よ忘るな

うすらひの下にうつろふ水のごとわれの心にひそむもの何 (二十八年)

水の上に浮きてし来れば川尻の砂にとどまる幾つ胡桃の実 (二十七年)

降るごとく落葉の音の聞えけるころを思へり冬逝かむとす (四十年)

ここに、戦後の世界を見るのであるが、どの歌も、この作者の歌と言つた世界のもので在りようが、まさに柴生田稔なのである。

晩年の歌

柴生田稔の晩年は、急速に衰えてその一日一日をおくつたと言つていいのであろう。

やうやくに我は老いたり酔ゆきもの愛してさくろを思ふおのれは (六十年)

男の子母に甘えて寄る時に母が打ちしを我は憎めり (六十一年)

また工事してゐるのかと呟きて妻の見にくく何ぞとあやしむ (六十二年)

子どもに返つたこのような歌も、柴生田稔の世界なのである。ただ、体が感応して歌をつくっているのかもしれない。今、これらの歌を尊ぶのである。

これらの歌を含めて、柴生田稔の世界を受け止めなければならない。それが人間の境涯

であり、短歌だから歌い得る世界なのだ。

柴生田稔は、明治三十七(一九〇四)年に生まれ、平成三(一九九二)年に八十七歳でその生涯を終えている。活動は、昭和という時代と重なるのである。柴生田稔という一人の歌人とその在りようを書いてきて、その意味するところは、

時すぎて人は説かむか昭和の代のインテリゲンチヤといふ問題も (十年)

の一首と共に考えなければならぬ。さらにまた、次の歌がある。

悔いなしとわが言はねども成行きは成行きにして止むべからず (五十六年)

内省する思いだろう。常に省みて悔い思うところである。柴生田稔は、この嗟嘆のころを生涯いだいていたのであった。そして、その文字は、昭和という時代を誠実に生きた、知識人の生そのものであった。その良心は戦争によって、一度試され、生涯こだわつたところに、柴生田稔の独自の世界の展開を見ることが出来る。同時に、その時代時代にあつて、内省するところが常に働いて、厳しく時代を歌い得たのであろう。

(おおかわら・よしゆき「短歌21世紀」編集発行人)